校長室だより～燦燦～ №４４１

合唱コンクール

2021.10.18

この時期になると、中学校では文化祭や学習発表会が開催される。その学校ごとに名称もある。野田中学校では「王梨音祭」である。その内容は、学校によって、それぞれ工夫が凝らされているが、共通している部分がある。それが「合唱コンクール（合唱祭)」である。

中学校では、どの学校でも合唱コンクールを行うのはなぜなのか。そこに教育的な価値があるからだろう。

私も学級担任をしているときには、合唱コンクールに対して並々ならぬエネルギーを注いでいたように思う。まず、どの曲を歌うようになるか、これが大きい。希望の曲が重なれば抽選である。「あの曲になるといいな」と思いながら、結果を待つ。たとえ第一希望の曲にならなかったとしても歌い込んでいくうちに、その曲を好きになってくれればよい。

そして、学級ごとに練習が始まる。最初からやる気満々なのは、女子生徒である。女子がリードして練習が進む。男子はというと、女子に言われるままに半ば仕方なく歌っている。よくある光景である。

特に３年生の意気込みはすごい。女子は熱いのだが、男子の２／３は冷めた感じである。日に日に女子の不満がたまっていく。そして、ついに女子の数名が爆発する。さすがに男子もわるいような気がしてくる。だからといって、劇的に変わるものでもない。

担任はというと、ずっと我慢して事の推移を見守っている。女子からの訴えもある。コンクールの日が迫ってくる。いよいよ担任の出番である。「男子はもっと声を出せよ」などと当たり前のセリフを言っているようでは話にならない。ここで、どんな言葉で生徒の心に響くことを言えるかである。担任としてのすべてが問われる。

それでも、男子の一部は、スイッチが入らない。コンクール前日になっても変化がない。そして、ついに担任は爆発する。あとは、当日を迎えるだけである。

いよいよ合唱コンクール当日となる。朝の練習で担任はいたって冷静に語りかける。自分の学級がステージの上にあがる。いよいよ演奏が始まる。あの緊張感は担任の醍醐味の一つである。合唱は、出だしで決まる。今までろくに声を出さなかった男子が、見事な低音を響かせる。鳥肌が立つ。そして号泣である。もう結果などいい。もうこれで十分である。

コンクールなので順位はつく。生徒たちは、その結果に大きく反応する。最終的には、どの学級もがんばったからこそ、喜びもするし、落胆もする。最優秀賞になればいうことはないが、栄冠に輝くのはたった一つの学級である。コンクールが終了し、学級では、担任が生徒に話しながらまた涙する。

合唱コンクールには、ドラマが存在する。それも劇的なものである。紆余曲折を経て、当日、会場に男声が響き渡る。隣で歌っている女子もうれしさをこらえながら声を出しているのだろう。合唱コンクールのもつ力は、生徒の卒業文集を読めばわかる。部活動の思い出、修学旅行の思い出と並んで合唱コンクールの思い出がある。それだけ、生徒にって文章として残すほどの何かがあるということだろう。

その合唱コンクールが、今年はない。なくなって気づかされることがある。どの学級担任の先生も、来年度、合唱コンクールが行われれば、今まで以上に熱く燃えるはずである。どの学級にも熱いドラマが展開されることを望む。